岡山醫學會第54回總會演說抄錄

第 1 日

國民儀禮　　會員一同

午前9時開會

開會の辭　　緒方庶務主幹

1) 海驢の膽汁成分に就て

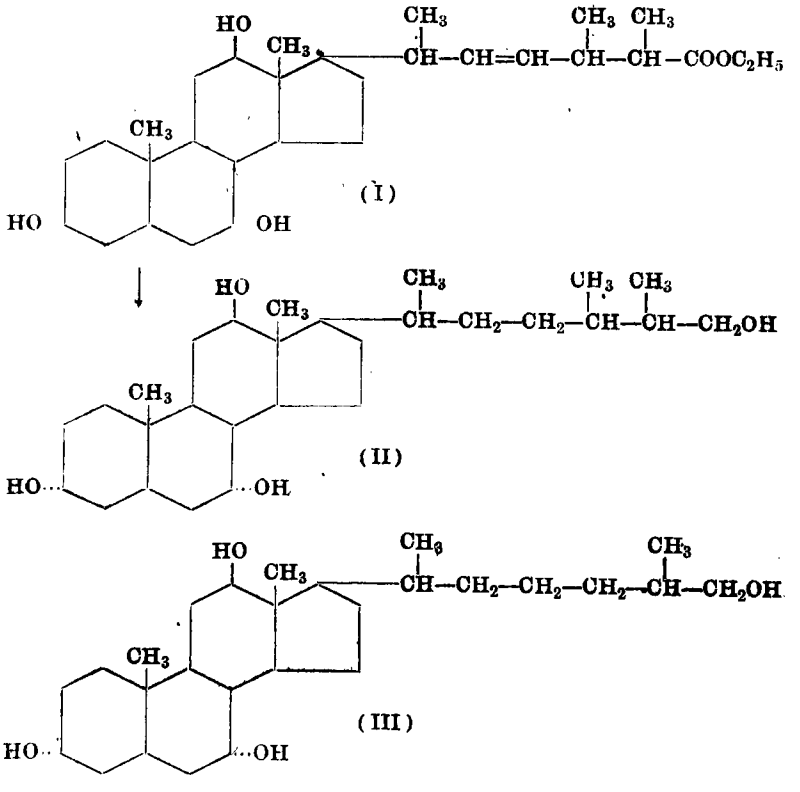
壺井　進（生化學）

海驢(「アシカ」)の膽汁を常法によりて處理し之が主として β-Phocae-chol-酸 $C_{24}H_{40}O_4$. Chol-酸 $C_{24}H_{40}O_5$ よりなり此外少量の異性體 α-Phocae-cohl-酸を含有する事を究めたり.

2)「ステロ膽汁酸」竝に各種膽汁酸の「ナトリユームエチラート」による還元物質の比較に就て

松元健二（生化學）

2異性高級膽汁酸(C_{28})Trioxybufosterocholen-酸(I)及びTrioxy-isosterocholen-酸の「エチールエステル」をC_2H_5ONaにて還元して第1級Alkohol(II)となし同じく第1級Alkoholたる Tetraoxynorbufostan($C_{27}H_{48}O_4$)(III)と比較したるに諸種の物理的化學的性質異るのみならずTrioxysterocholanol (28) は融點 216° を有し融點 215° の Trioxyisosterocholanol(28)との混合融點は 208° を示し Tetraoxynorbufostan は融點 330° を有し兩者全く異るものにして之によつて前者が C_{28} の高級膽汁酸たる事を間接に證明し傍ら各種 C_{24} の膽汁酸より同樣にして種々なる第1級「アルコール」を誘導して其の性質を明かにせり.



3) 海猿膽汁よりGlykochenodesoxychol-酸の分離とChol-酸の存否に就て

繼　鐵之進（生化學）

海猿膽汁を酸性にして「エーテル」にて抽出し融點174°針狀結晶の新抱合膽汁酸 Glykothenode-soxychol-酸を分離し得たるが此酸を除きし殘餘の膽汁中にはChol-酸及びDesoxychol-酸を含有せざる事を明かにせり.

4) Uracil 鹽基が炭水化物新陳代謝に及ぼす影響に就て（第2報）

末富九州男（生化學）

核酸代謝產物 Pyrimidin 鹽基の一たる Uracil の炭水化物新陳代謝に及ぼす影響に就ては，之が正常白鼠の肝臟乳酸量の增加を來す作用あることを認め，嚮に第53回岡山醫學會總會に於て發表せり．而して其の後の研究成績の主なるものを擧ぐれば次の如し．1) Uracil は正常白鼠の血液乳酸量を輕度乍ら減少す(減少率, 12.6%). 2) Uracil は正常白鼠の肝臟糖原質の生成を減退せしむ（減少率, i) 糖內服の場合, 39.9%, ii) 糖注射の場合 15.7%. iii) 糖, Arabinose 及び Na_2HPO_4 注射の場合, 41.0%) 3) Uracil は正常家兎の饑餓血糖を僅か乍ら上昇せしむる傾向あり（10—17%）(4 Uracil は白鼠の腦組織乳酸量及び家兎の人工過血糖には影響を及ぼさず．以上の實驗に於ける Uracil の注射量は白鼠に於ては 20 mg/體重100 g 家兎に於ては 70 mg/體重 1 kg なり.

5) 幼若家兎に於ける濱崎氏「ケトエノール顆粒」研究（第1報）「クローム・ケトエノール」顆粒に就て

渡邊直明（病理）

家兎の胎兒組織に於ける「クローム・ケトエノール顆粒」(Cr-KEG) に就ては，曩に平本の研究あり．又成熟家兎の夫れに就ては，既に濱崎氏の精細なる系統的研究あり．乍併兩者の中間期に於ける幼若家兎の KEG に關しては未だ研究せられし事なし．余は先づ Cr-KEG に就て研究し，今回若干の知見を得たるを以て，玆に報告せんとす．實驗材料としては生後5日より30日に至る幼若健康家兎を選び，各種の組織に就きて「石炭酸フクシン沃度法」を施して Cr-KEG を檢索し，Cr-KEG と「ケトエノール類脂體」(KEL) との鑑別には Baryt 水分別法を用ひ次の成績を得たり．幼若家兎に於てはKEGは一般に僅少なるもKELは甚だ多數に存す．日を經るに從ひ，KEL は漸次減少し KEG 增加する傾向あり．乍併，生後30日に及ぶも KEG は成熟家兎に於けるが如き定型的組織像をなさず．目下更に生後30日以降の例に就ても研究中なり．組織所見に於て最も特異なりしは，一般に細胞核は Baryt 水處置後 Chromatin 索著明に呈色するもの多く，殊に胸腺細胞竝に淋巴細胞に於て然るを觀る．肝細胞に於ては數箇の KEL が「ケトエノール物質」に包埋されて1箇の粗大塊狀顆粒を形成せることあり，Baryt 水分別後に淡色を行ふ時初めて個々の KEL を明視し得るに至る.

6) Ketoenol 物質の抽出竝に分光化學

○濱崎幸雄
藤岡肇（病理）

Ketoenol 物質は濱崎其の他により廣汎なる組織形態學的，組織化學的竝に生物學的研究の結果，殊に饑餓家兎に對する核酸給與實驗（小西）人體「プリン」試食に於ける尿內 Ketoenol 物質の消長（山川）及び「ヒヨール酸」を用ひての Ketoenol 形成模型實驗（濱崎）等により本物質が核酸及び其の分解產物を主成分となすものなることは最早疑ひなきに至れり．演者等は之に最後の決定を與へんがために本物質を抽出し之を分光化學的に檢索を行へり．抽出法は本物質の組織學的檢索に於けると同樣「クローム」合劑固定を行へる家兎肝組織を十分水洗したる後，乳鉢樣に細挫し之を稀薄「ベ

リツト水」にて抽出す．抽出液に硫酸を加へて「パリューム」を除去，低溫濃縮を行ひ無蛋白淡褐色透明の液を得たり．この際抽出液が最初より無蛋白なることは細胞核蛋白が操作によりて人工的分解を受けざりし證として特に注意すべきことなり．この抽出液をLeveneの方法に從つて各種の分劃に分ち其の各々に於てAdam-Hilgerの裝置を用ひ鐵弧光による紫外線吸收像を撮影せり．かくて得たる寫眞版24枚に就きて精細なる檢討を行ひし結果，Nucleotide及びPurinbasenの分劃に於て夫々Guanin核に相當する吸收曲線を得たり．次に家兎骨骼筋より同樣にして抽出液を製しEmbden Zimmermaenの方法に從つて分劃を行ひ同樣撮影を行ひしが終にAdenin核に一致する吸收像を得ざりき．

7) 流行性腦炎病毒靜脈內接種に際する內臟に於ける核包含體形成に就て(「ヴイールス性」疾患の核病理學的研究　第12報)

○濱崎幸雄
杉原高雅 (病理)
藤岡肇

流行性腦炎病毒の鼻內，腦內，腹腔內接種に際しては腦及び嗅粘膜に特殊核包含體形成され又內臟に於ては淋巴腺及び脾臟に少數の核包含體を證明せり(濱崎・永瀨)．然るに病毒の大量を靜脈內に注射する時は腦及び嗅粘膜と共に內臟に夥しき核包含體の形成さるるを認めたり．注射後48時間を經る時は既に脾，淋巴腺及び骨髓に於て多數に核包含體形成さる．包含體は網內細胞核內に出現し大さ2—7μ類圓形或は小塊狀をなし境界は腦膠細胞に於けるが如く明瞭ならず．當該網內細胞は著しく腫大し核も膨大して包含體との間に空隙を形成するも膠細胞に於けるが如く廣からず．注射後時日の經過と共に包含體の數增加し4日に於て其の頂點に達し爾後は漸次不明瞭となり7日を經る時は往々包含體の檢出困難なる例に遭遇せり．斯かる時期に於ては核の變性强く其の崩壞と共に包含體の崩壞するあり又核の變性は著しからず，包含體のみ基質組織となり嗜酸性を減じ終に消失して之に代りて核壁より核素の再生さるるを認め得たり．肝星細胞に在りても注射後48時間にして少數の核包含體形成され其の數は4日に至る迄增加し其の後は遞減を來せり．包含體は一般に小形にして核の一側に生ぜる小空隙中に存し稍々細長なる形態をなすこと多し，肺に於ては27例中4例にて極く少數の中隔細胞中に核包含體を檢出し得たるも，腎に在りては1—2間質細胞核に於て之に疑はしき像に接したるに過ぎず．既に緒方・高木氏等は流行性腦炎罹患動物の一般的組織變化は比較的早期に於ける內臟の變化(卽ち內臟期)と末期に起る腦脊髓の變化(卽ち內臟期)，と末期に起る腦脊髓の變化(卽ち腦脊髓期)に區別すべきことを提唱せり．然るに濱崎の流行性腦炎核包含體の檢索成績に於ては病毒を靜脈內に接種する時には概ね內臟期に一致して著明なる包含體形成されしが，他の接種法に在りては斯かる現象著明ならざりき．

8) 味覺に於ける刺激重疊作用に就て

西田勇 (生理)

味覺閾値を檢査する際閾値と舌の刺激面積との間の關係を考慮せる者は案外少いのに驚く程である．一般的には舌の刺激面積大なる程閾値小となる事を暗示する實驗は時々見られるも其の具體的關係については殆ど見る可きもの無く，Camererの如きは舌の刺激面積が40mm²以上なる時は刺激面積と閾値との間には一定の關係は認められないと云ふ．余は2—25 mm²の範圍の面積に於て味覺閾値と刺激面積との關係について研究せり．試驗材料としては食鹽，醋酸，「鹽酸キニーネ」，溶性「サッカリン」を用ひ，一定面積を刺激するには一定面積の紙片に液をつけ之を舌上に置く如き

方法を用ひ試驗液の溫度は15°Cとせり．かくして得た閾値と刺激面積との關係は殆ど直角双曲線的關係を有し閾値の濃度(%)と刺激面積との積は一定なり．之を例へて言へば，味覺細胞1箇を刺激するも味覺の起らざる程度の，即ち1箇の味覺細胞に對しては閾値下の濃度に於ても2箇或は3箇の味覺細胞を刺激すれば味覺を生ぜしめ得ると云ふ如くに考へられるものにしてこの現象の説明としては，運動神經に於けると同樣に知覺神經に於ても，刺激の重疊作用を起すに依るものと考へられる．

9)「心臟フリンメルン」に及ぼす「鹽酸パパベリン」の作用

津田次郎（生理）

心臟動停止法は從來幾多試みられたが，尙ほ理想的な方法は見當らない．從來用ひられたのは冷却法，通電法及び藥物に依る停止法が主なるものである．藥物としては「硫酸キニーネ」,「鹽化カリ」が最も多く用ひられてゐる．Lindner及びL. N. Katzは最近「鹽酸パパベリン」が「心室性フリンメルン」停止に著效あるを述べたが，余も亦其の見る可き效果あるを認めた．即ち家兎を用ひ，其の心室を直接「インダリトリウム」に依り刺激し「フリンメルン」を惹起せしめ，其の左心室に「鹽酸パパベリン」溶液を注入して其の停止作用を檢した．多くの場合注入に依り自然に正常搏動を回復せるも「心臟マツサージ」を要する事もある．又前處置として「パパベリン」を注入しておく事に依り Nachflimmern は殆ど完全に防止し得るのを認めた．次で其の作用機轉を考察した．即ち蛙を用ひ心筋興奮不應期を測定せるに「鹽酸パパベリン」に依り著明に延長を來す事を知る．又「鹽酸パパベリン」注入に依りE.K.G.は著しい變化を受け徐脈及び全心室波の延長を來すに反しPRは著しい短縮を來す．即ち刺激傳導系の傳導速度は速になる．由て「鹽酸パパベリン」の「フリンメルン」停止作用及び Nachflimmern 防止作用は心筋の興奮不應期を延長する事に依り「フリンメルン」を惹起せしめる刺激を傳へ難くし，反之靜脈實よりの統一ある刺激を得へ易くせしむるものに由ると考へるを至當とせん．

10) 家鼷に於けるマルピギー氏管內の結晶物に就て

赤枝　裕（生理）

從來家鼷に關しての研究は主として生化學的方面より檢索されたるものなるも演者は偶々昆蟲類特に家鼷の排泄器官たるマルピギー氏管內に常時認めらるる結晶物に就て2,3小實驗を行ひたり．之等マルピギー氏管內にある多量の六角板狀の結晶物は稀薄なる鹽酸に溶解し，2%の硫酸に對し硫酸石灰(Gips)の結晶を作らず，又醋酸及び1%硝酸銀に對し蓚酸銀の沈澱も認められず，而もマルピギー氏管の凍結標本にて之等結晶物は細胞內のみならず細胞外にも認められたり，猶ほ4% Indigoccarmin 溶液腹腔內注射後24時間にしてアルピギー氏管に就て型の如く組織的檢査を行ひたるもマルピギー氏管は概ね色素攝取を營まざるものの如し，周知の如く蓚酸はCa鹽として植物中に存在し家鼷の常食する桑葉中の蓚酸鹽がマルピギー氏管部位に於て有害なる蓚酸を石灰と化合せしめて不溶解の蓚酸石灰の結晶として一つの自衛的性質ならんか，兎に角マルピギー氏管內に在る多量の主として六角板狀の結晶物の主成分は恐らくは蓚酸石灰なるべし．

11) 實驗的家兎血壓上昇に於ける血中Calciumの消長に就て

橋本　明（生理）

演者は曩にVitamin CがAdrenalinに依る動脈硬變症に對し其の成生を防止し且既に發生せる動脈硬變症に對し治癒的機轉を營むことを報告せり．其際Adrenalin型動脈硬變症に於てCalcium

の沈着甚しきことを認め，Calcium（以下Caと記す）の沈着が動脈硬變症に對し何等かの關係を有するものにあらずやと考へ，先づAdrenalinとCaとの關係に就き檢索したるに，Adrenalinの注射に依りて血中Ca量は減少することを認め，この血中より移動せるCaが動脈內に沈着するにあらずやと考へたり．然らばこのCa量の減少はAdrenalinのみならず他の方法に依りて血壓を上昇せしむる時に於ても同樣なるものなりや否やと考へ，家兎を固定臺に固定し，これを廻轉椅子に心臟部より頭部に掛けて遠心力が働く樣に固定し1秒1廻轉の速度にて，1日3回5分間宛毎日廻轉し1週間，2週間，3週間毎に血中Ca量を測定せるに，5例中全部實驗前に比し血中Ca量の減少を認めたり．次で下半身に遠心力の働く樣に廻轉椅子に家兎を固定して同樣に廻轉したるに5例中3例に於て血中Ca量の增加を認め，2例に於ては變化を認めざりき即ち機械的に血壓を上昇せしむる時に於ても血中Ca量は減少することを認めたり．然るに血中Caの新陳代謝は交感神經と密接なる關係を有するを以て，兩側內臟神經を副腎に入る手前に於て切斷し，3週間經過し血中Ca量の安定するを待ち，前と同樣に廻轉を行ひたるに，上半身に遠心力が加はる樣にして廻轉したるものにありては，5例中4例に血中Ca量の減少を認め，1例は變化を認めざりき．次で下半身に遠心力を及ぼす樣にして廻轉したるものにありては，5例中3例に血中Ca量の增加を來たし，1例に於て變化を認めず，1例に於て減少を認めたり．即ち內臟神經を切斷したる家兎に於ても同樣に血壓を高めたる際にはCa量の減少を招來するものにして，血中Ca量は血壓上昇の際には減少を來たすものなることを認めたり．

12) 鮒，金魚の聽覺，特に鰾との關係に就て

松浦祐一（生理）

Weber氏小骨を有する魚類の聽能に，鰾が如何なる機能的役割を占めるかと云ふことに關し，鰾に種々の操作を加へたための聽能の變化を詳細に追求し，次の如き成績を得た．即ち鮒，金魚は毎秒100—1284振動の音に對して反應し，其の際鰾は一種の共鳴囊として作用し，其音振動をWeber氏小骨をへて內耳に傳へる．而して內耳の解剖學的構造より考へて，高音は球囊に於て，低音は「ラゲナ」で感受せられると思はれる．尙ほ又頭及び體側にある感球は音の感受には無關係であることを證明し得た．

13) 「ヴィタミンB$_1$竝にB$_2$」の「メダカ」の酸素消費量に及ぼす影響

東島辰雄（生理）

饑餓の狀態においた「メダカ」を水槽中に飼育し其の液槽中に「ヴィタミンB$_1$竝にB$_2$」を加へた時の被檢動物の酸素消費量をWinklerの法によつて定量し，下記の如き實驗成績を得たり．即ち「ヴィタミンB$_1$」竝に「ヴィタミンB$_2$」の濃厚液は共に「メダカ」の酸素消費量を增加せしめるが，其の作用は前者に於てより著明である．

14) 種々哺乳類の舌下神經の比較組織學

木下定之（解剖）

「ライオン」，熊，「ノロシカ」，「キヨン」，鹿，「カニクヒマングース」，人，狸，家兎，犬，猫の舌下神經が，舌骨舌筋の外側面で數枝に分れる前にて，其の約5mmの長さを切取り，10%「フオルマリン」に固定後，Orth氏液にて處理し，其の「チエロイヂン」切片にWeigert氏髓鞘染色法を施した．而して有髓神經線維250の直徑を接眼「ミクロメーター」を用ひて計り，尙ほ神經線維の總數を擴大寫眞に就て計算した．其の結果は舌下神經の有髓線維の總數は少しく例外はあるけれども想像せられる如く一般に體重と舌重の大なるものほど多い．舌に大なる力を出すと思はれる動物ほど線維は太く，舌を巧妙に動かすと思はれるものほど，其のgr單位に對する線維數が多い．

15) 魚類の背側軀幹筋の比較組織學的研究

平井達二（解剖）

明かに異つた習性をもつ數種の魚類，即ち海洋魚(「ブリ」,「マグロ」)，近海魚(「ススキ」,「ボラ」,「ホシザメ」,「イワシ」,「クロダイ」)，岩礁魚(ホシハタ」,「カサゴ」,「キュウヤン」)，海底魚(「コチ」,「エソ」)について，其の背側軀幹筋の組織學的構造を比較檢査した．活潑に運動する海洋魚と近海魚はあまり運動しない岩礁魚と海底魚に比して筋線維は細く，其の横斷面は圓形をおび，又線維間結合組織は良く發達してゐる．筋原線維は最も活潑に運動する海洋魚では細くて密に存し，其の横斷面は圓形である．一方最も不活潑な海底魚では太くて粗に存し，横斷面は殆どすべてが板形である．運動量が兩者の中間にある近海魚と海底魚は原線維の太さでも粗密の度でも兩者の中間にあり，原線維の横斷面は圓形と板形のものが混在する．詳細は解剖學雜誌に印刷中である．

16)「カンガール」諸筋の組織學的研究

富永忠人（解剖）

骨格筋の筋線維の太さや筋線維間と筋束間の結合組織，夫れに含まれる彈力線維の分布狀態等が筋の働きと關係あることは既に明かである．私は特異なる形態と習性を有する「カンガルー」の諸筋に就て構造と機能の關係を檢討せんとし，全身より約30種の筋を取り，「チエロイヂン」切片を作り，「鐵ヘマトキシリン」法，「アツアン」法と「レゾルチンフクシン」法により染色し，筋線維の横斷面積を描畫裝置と測面計を用ひて計測した．1. 筋線維の横斷面積は內腹斜筋に最も大，大菱形筋と直腹筋に最も細い．2. 甚だよく働き且大なる力を出す尾の諸筋は筋線維の太さは中等大であるが，線維間の結合組織や彈力線維は甚だよく發達してゐる．3. 筋線維間の結合組織は背部，胸部，腹部，尾の諸筋によく發達し，特に外肋間筋に於て最も著しい．4. 筋線維間や筋束間の彈力線維は背部，腹部，尾の筋によく發達し，特に尾の筋に於て著明である．5. 働の少い前肢は，よく働き且働きに際して大なる力を出す後肢に比して甚だ小さく，筋の發達も著るしく劣り，筋線維も細い．

17) 鷄と蛙の胎兒の筋組織の等電點

稻葉義春（解剖）

發生學に於て形態の變化については研究が大いに進んでゐるけれども，細胞と組織の物化學的變化の研究は少い．私は鷄と蛙の胎兒につき染色により筋組織の等電點を測定した．等電 pH 値は鷄胎では 4.6 から 4.95 に，蛙胎では 4.3 から 4.7 に上つて行つた．鷄胎では夫れが孵化とともに漸次上つたが，蛙胎では早期に急昇し，身體運動が始つてからは多く上らなかつた．詳細は解剖學雜誌に印刷中である．

18)「スズキ」魚の消化器の上皮細胞と筋組織の等電點

清光博愛（解剖）

重層扁平上皮(舌，鰓腸)と核が細胞の中央にある圓柱上皮(中腸前部，幽門垂)の pHi は稍々高位にあり(4.9—5.0)，核が細胞內で低く存在する圓柱上皮(胃，中腸中部，中腸後部，後腸，膽囊，輸膽管等)の pHi は稍々低位にある(4.7—4.8)．其の pHi の低いのは粘液樣物質の存在によるらしい．同じ胃の上皮でも，粘液樣物質生產に與り核が細胞內で低く存在する被蓋圓柱上皮では pHi が低いが(4.7)，酵素物質を生產して粘液樣物質を生產しないらしい立方上皮なる腺細胞では pHi が非常に高い(5.1—5.2)．消化管壁の横紋筋の pHi は比較的高く(5.2—5.3)，平滑筋の pHi は比較的低い(5.1—5.3)．本研究は解剖學雜誌に印刷中である．

19) 人の表皮の等電點

大原孝度（解剖）

人の表皮の等電點に就ては，既に Zeiger 等の研究があるが，私は「フオルマリン」固定の4屍體に就て，年齡，部位，厚さによる表皮の差異を染色法により測定し，次の結果を得た．1. 幼若の頃は各層とも表皮細胞の等電點は低く，年齡の進むに從ひ芽層は殆ど變化しないが，他の層では漸次高くなる．2. 芽層，角層何れも等電點の最高は足背で，最低は額であつた．足蹠，陰莖，前膊屈側，肩胛間部，頰，手掌，手背は其の中間にある．3. 一般に厚く硬い部位の表皮細胞の等電點は高く，薄く軟い部位の夫れは低い．

20) 貧血狀態に於ける線組系

金田靖（解剖）

「マウス」の尾動脈から毎日1回，1—3回血液を放出し，失血性貧血に陷らしめると，皮下の蜂窠結締組織に著しい變化が起るが，就中，白血球の前階級と認められる細胞の增加が目立ち，これは線維細胞から生ずるものと認められた．

21) 線組系の「サルバルサン」攝取

荒田一郎（解剖）

靜注せられた「サルバルサン」が網內系に攝取せられるのは既知の事實であるが，私は「マウス」につき，進んで夫れが皮下に出で線組球と組織球にも攝取せられるものなることを Janeso 氏法により證明した．「サルバルサン」靜注により皮下に線組球と組織球が著しく增加することは前報の如くである．

22) 海地獄泉水の靜注が線組系に及ぼす作用

板岡一雄（解剖）

「マウス」27頭を3群に分ち，第1群は中和し且等滲壓とした泉水 0.1 cc を1回尾靜脈に注射し，1日，2日，4日後に殺し，第2群は 0.1 cc を1日1回づつ2回，第3群は同上3回靜注し，各々最後注射の1日，2日，4日後に殺して標本を作製した．泉水 0.1 cc を 1—3 回「マウス」に注入すると，皮下の線組系が强く刺戟せられ，線維細胞から線組球と組織球が多く生ずることが見られた．靜注の刺戟が重なると小形の組織球と單核球が增すが，白血球は孔核のものも多核のものも全く又は殆ど增さない．刺戟が去ると一旦生じた組織球は徐ろにもとの線維細胞に歸る．其の時組織球と線組球の體內に大小の空胞が生じ，其の大部分は細胞の表面から外に排出せられるやうに見えた．詳細は解剖學雜誌に印刷中である．

23) 强直流による動物膜の對陽極側破壞の實驗

關正次（解剖）

强い直電流により動物膜は單細胞膜も組織膜も其の對陽極側が對陰極側よりも破壞せられ易いことを見た．動物膜表面にある蛋白分子は內方に陰極を向け，外方に陽極を向けて存在する雙極子であると考へられ，かかる雙極子は膜の對陽極側に於て廻轉せられ，其の結果膜の破壞を來すらしい．

24) 一藥物 p-Oxybenzylguanidin に由る抗體產生に就て

○奥島貫一郎
富田次雄
右田裕
（藥理）

止血劑 (Jrmerin) として應用せられ，最近又「チフス」及び赤痢に效果あること明かとなれる本藥物が，單獨に動物體內に於て抗體を產生せしむること，實驗中偶然にも發見せられたり．卽ち本物質を家兎に靜脈內，皮下又は經口的に，1回又は數回投與する時は，其の血淸は駒込A菌，志賀菌，大原菌及び大腸菌に對し著明なる凝集反應を呈す．30 mg/kg の靜脈內注射により駒込A菌に對する凝集價は翌日平均580倍に達し，約2日後

徐々に下り，4週間に及ぶも對照價に復せず．數回注射の際は注射中頂點に留り，以後同樣の經過を取る．100 mg/kg を經口的に與ふれば，寧ろ之に勝る價を認めたり．志賀菌に對しては凝集價稍々低く，大原菌に對しては更に低きが如きも，大體類似の經過を取る．大腸菌に對しては以上諸菌に對するよりも遙に高き凝集價の上昇を起す，經口的投與の比較的有效なることも同樣なり．斯く內服的に效多きことは普通の抗原と趣を異にする所なり．以上の現象は自然凝集，酸凝集又は本物質の直接作用による凝集に基かざることも明かにせり．Alkaloid に屬すと覺るべき本物質が一定の病原菌に對し顯著なる凝集反應を起さしめ，而も其の經過長きこと及び經口的投與の比較的有效なること等は注目すべき新事實なりと信ず．

25) 慢性麻藥中毒4日間全治療法に就て

前田秀雄（細菌）

麻藥慢性中毒患者35名に就き，未知の一生藥の內服を主體とせる新治療法に依り短期間內に苦痛少なく全治せしめたるを以てこゝに報告す．治療法を卽斷法と急速遞減法に分つ，前者22例は服藥と同時に麻藥を全く禁斷し，後者は禁斷症狀强度なる患者に對し遞減的に麻藥を與ふる方法なり．13例．症狀としては一般に輕微なる禁斷症狀の外全身症狀に著變を認めず，禁斷症狀の大多數は第2日目に發現するも，第3日，4日日には急速に消失亦は減退す．初期治療者中幾分苦痛を訴へたる例10名あるも近時大量投藥開始以來，苦痛は著しく輕減せしめ得たり．本治療藥の成分及び治癒に及ぼす作用機轉等は目下研究中にして未だ發表の域に達せざるも恒か4日間の服藥に依り100%全治し而も苦痛の輕微なるは從來の治療法に比して遙に卓越せるものと信ず．

25番追加

錦織雄吉（米子）

治療方法は前田氏と略ぼ同樣なり．治療人數は唯今まで42名，年齡は25歲乃至72歲，麻藥名は「モルヒネ」，「パントポン」，「ナルコポン」，「パンスコ」，「ナルスコ」，「ヘロイン」なり．中毒期間は1年乃至48年，治療日數は2日半乃至5日，但し5日は皆48年乃至30年間の長期中毒患者のみ數名，他は全部4日以下なり．

26) 天津に於て分離せる「サルモネラ屬」菌の分類に就て

村上　榮
○三島武男
村江通之
（細菌）

天津に於て，昭和15年より16年に至る1箇年間に「チフス」，「パラチフス」或は赤痢樣患者より竝に同仁會防疫處に於て分離せられたる「サルモネラ屬」菌113株に就き Kauffmann-White の Schema に從ひ系統的分類を行ひたる結果「パラ」A 16：「パラ」B 38：「鼠チフス」2：「パラ」C 2：「豚コレラ」1：「チフス」49：腸炎菌3：「パラ」K 2：を得たり．「パラ」A 16：の中 I，II：a の抗原因子を有するもの14，II：a のもの2，「パラ」B 38：の中 I，IV，V：b：1，2 の抗原因子を有するもの4．I，IV：b：1，2 のもの5．IV，V：b：1，2 のもの17．IV：b：1，2 のもの12．「鼠チフス」2：の中 I，IV，V：i：1，2 及び IV，V：i 1，2 の抗原因子を有するもの各1にして，夫々 Vi 抗原を有せり．「パラ」C 及び「豚コレラ」は皆 VI，VII：c：1，5 の抗原因子を有し Vi は缺げり．「チフス」48：の中 OH 型41，O 型8にして OH 型41の中26は Vi を有し，15は Vi を缺ぎ O 型8の中3は Vi を有し5は Vi を缺げり．腸炎菌は IX：g，m の抗原因子を有し培養學的性狀を合せ考へる時「ヤコ型」腸炎菌なる事明白なり．「パラ」K 2：は共に I 抗原因子を缺如し IX：a：1，5 の抗原因子を有せり．

27) 天津に於ける在留邦人の法定傳染病に關する統計的觀察(昭和13, 14, 15年)

村上 榮 (細菌)

演者は昭和14—16年, 凡そ3箇年間同仁會天津防疫に勤務し, 當時蒐集した資料に就て同13—15年3箇年の天津在留邦人の法定傳染病統計的觀察を述べる. 天津の邦人々口は昭和11年に於ては20.85名であつたが, 追年激增して同15年末に8.50.059名即ち約2倍半に膨脹した. この3箇年平均法定傳染病發生數は364名, 其の患者百對死亡率は10.91%, 人口1萬對罹患率は87.38同死亡率は9.53である. 尙ほ病類別發生率, 死亡率, 年齡別發生率, 月別發生率及び租界別發生率に就て述べる.

28) 抗體竝に酵素の葡萄糖溶液中に於ける溫熱に對する抵抗力に就て

永田 正 (衛生)

血清蛋白を加熱する場合適當なる溫度に於て凝固するは明かなることにして又血清蛋白と密接なる關係にある血清中に存する補體竝に各種抗體も加熱により其の働を失ふは知悉のことなり. 而して加熱による血清蛋白の凝固と抗體の消長との間には密接なる關係あるものの如し. 余は糖液(蔗糖, 葡萄糖)中に於ては糖液の濃度に比例して血清蛋白の凝固の抑制せらるるを認め昨年加熱による血清蛋白の凝固と補體の消長に關しては旣に報告せしところなり. 其の後糖液中に於ける血清蛋白凝固と各種抗體即ち①溶血素②血球及び細菌凝集素③沈降素及び補體結合性抗體の消長に關し研究し來たり更に抗體と化學的に性質の相似たるものならんとせられてゐる酵素①「ヂアスターゼ」②「トリプシン」等の糖液中に於ける溫熱に對する抵抗力を研究し來たりたるに之等の糖液中に於ける溫熱に對する抵抗力は糖液の濃度の高くなるに從つて增加せるを認めたるを以て其の結果を概括し報告せんとす.

29) 狀態特異性に關する實驗的研究 (第2報)

田川正三 (衛生)

(1) 抗牛血球免疫家兎血清を加熱するに67.5°Cに於て免疫價略ぼ半減す. (2) 抗牛血球免疫家兎血清を以て海猿を感作し2週間後能働性過敏症を行ふに同血清抗體稀釋價結合帶4分の1量の再注射により强度若くは定型的過敏症死を呈す, (3)再注射の際血清を67.5°Cに加熱する時は過敏症狀を呈するも死に至らず. (4) 死後若くは再注射後の海猿血清を檢するに何れも略ぼ再注射量に相當せる溶血素及び血球凝集素を含有す. (5) 市販の健康馬血清を以て感作及び再注射を行ふに同じく狀態特異性を賦與し得るを認む. 但馬血清は牛及び家兎血清に比し熱に對する抵抗性少しく高きものの如し. (6)「抗ヂフテリー」毒素免疫馬血清に於ても同樣なり. この際死後若くは再注射後の海猿血清を檢するに略ぼ再注射量に相當せる「ヂフテリー抗毒素」を有するを認む. (7)「ヂフテリー」毒素抗毒素間の沈降反應に於て抗毒素血清を67.5°Cに加熱する時は抗體稀釋價略ぼ半減す. (8) 海猿能働性過敏症に於けるX線所見を檢するに發作中及び死後に於ては肺臟の膨脹心臟の擴大及び大血管の擴張せる如き像を認むるも發作輕快後1時間に於ては全常態に復するを認む.

30) 家兎甲狀腺全摘出の免疫學的研究 血球凝集反應及び補體量に就て

福本 久 (衛生)

(I) 血球凝集反應に就て. 家兎を甲狀腺全摘出をなせるもの, 甲狀腺全摘出を行ひ牛甲狀腺乾燥粉末液を適宜注射せるもの, 對照として甲狀腺摘出手術も行はず甲狀腺劑の投與せざる3群に分ち實驗せる下記の成績を得たり. (1) 甲狀腺摘出は抗體發生に於て血球凝集素價は對照に比し稍々低し, 即ち抑制的に作用す. (2) 甲狀腺摘出は抗體發生最初に於て對照に比して大差なきも, 消失は

稍々遲延す．(3) 甲狀腺劑の注射せば凝集素價は對照と餘り變りなし．

(II) 溶血性補體量に就て．家兎を甲狀腺摘出を行へるものと，摘出せざるものに分ち檢するに手術後間なく死亡するもの多く未だ確定的の事は云へざるも大體大したる變化なき樣なり．

31) 諸種臟器浸出液殊に睾丸浸出液の血球に及ぼす影響に就て

井野昌治（術生）

1928年 Duran-Reynals により動物の睾丸浸出液を痘苗に添加して接種すると發痘が著しく增强する事實が發見され其の後 Mc.-Clean Hoffman 及び Duran-Reynals 等により色素に睾丸浸出液を添加して動物の皮內に注射すると其の色素の擴散度が之又著しく增强せられる等の事實が發見されたり．扨て余は最初に睾丸浸出液が血球に對しては如何なる影響を及ぼすやにつき腎臟及び肺臟浸出液を對照として檢索せり．先づ諸動物の睾丸，腎臟及び肺臟の生理的食鹽水浸出液を作製し之を諸種動物の血球に混和したるものを2時間孵卵器(37°C)に入れ後血球を良く洗滌しこの血球に就て低張食鹽水に對する抵抗竝に溶血反應を見るに睾丸浸出液にて前處置せる血球に於ては溶血度何れも著しく促進するに反し腎臟及び肺臟浸出液にて前處置せる血球に於ては極く僅に溶血度が促進するか或ば殆ど影響無かりき．次に牛睾丸より浸出せる「リポイド」竝に市販の「睾丸抽出ホルモン」なる「スペルマチン」にて血球を處置し同樣の實驗を試みたるに殆ど影響を認めざりき．併せて種々なる溫度にて睾丸浸出液を加熱し其の血球に及ぼす影響を檢索せり．尙は以上の實驗と同時に各臟器浸出液，種々なる溫度にて加熱せる睾丸浸出液，睾丸より浸出せる「リポイド」及び「スペルマチン」を色素に添加して家兎の皮內に注射し其の色素の擴散度と血球に及ぼす影響とを比較せるに兩者間には平行關係を認めたり．

32) 膠質反應(色素絮狀反應)に於ける結合及び阻止帶に關する研究

小坂澄治（術生）

免疫反應に於ける結合及び阻止帶現象の成立機轉をより一層明瞭ならしむる目的にて酸性及び「アルカリ性」即ち電氣的に陰性及び陽性に荷電せる「アニリン色素」の水溶液種々量を混合せし場合に發現する絮狀反應の强度を檢したる處，絮狀反應は之等2色素が好適一定量比に於て共存する場合には常に最も强く發現し，何れか一方が多きに或は少きに過ぐれば常に減弱するものなるを知り得たり．本關係は演者が曩に發表せる免疫溶菌素血清の殺菌作用と菌量との關係と全く同樣にして興味深し．

33) 血色素の免疫反應促進作用に就て（續報）

宮田貞二（術生）

血色素は血球凝集素に於て最も著しく，溶血素大腸菌凝集素沈降及び過敏症に對し反應促進的に作用し，其の發現には抗原と血色素の量比の外，之等兩者の Medium に對する適當なる濃度の存在すること，血色素は種々なる動物のものを用ひるも，又酸化，酸化炭素，炭酸血色素及び「メテモグロビン」を用ふるも其の作用皆殆ど相等しきことを述べんとす．

34) 照射抗原の過敏症に及ぼす影響

世木田務（術生）

長短各種波長の光線を照射したる抗原(牛血清)を結合帶に準據し再注射し海猿過敏症に及ぼす影響を觀たるに，レ線及び紫外線の一定量を照射したるものに於ては抑制作用あるを認め，赤外線，超短波照射抗原はさしたる影響を及ぼさざるを知れり．斯る變化は光線照射量に關係する所あらんも臨牀上使用すべき程度の少量にては極めて僅微なり．之が過敏症抑制機轉を純血清學的立場より檢索せるに，照射抗原は抗原抗體結合を緊密なら

しむるものにして是は生體外に於ても同樣證明し得．卽ち本抑制機轉は一次性のものなり．照射抗原の示す斯かる態度は照射光線の光化學的作用により抗原たる牛血淸は其の膠質狀態を變じ，以て抗原抗體結合を不適ならしむるものならんかと推論せり．

35) 注入抗原量と免疫價の高低

緒方益雄
○大川富雄 (衛生)

各種量の抗原（牛血淸 0.05 cc—0.000005 cc）を家兎に頻回靜脈注射を試み，其の注射抗原量と產生抗體量との關係を見たるに次の結果を得たり．1) 注射抗原濃度の減少と共に產生沈降素の稀釋沈降素價は勿論減少するも，結合帶は寧ろ高稀釋側に移動する傾向あり．2) 補體結合反應に於ても略ぼ同樣の關係を認む．3) 從來沈降素產生を見ざる程度の微量抗原（0.00001 cc）も頻回連續注射をなす時は沈降素の產生を見る．而して其の沈降素はウ氏法にては可成り高價を示すも，緒方氏法に於ては稀釋沈降素價極めて低く殆ど單位量に近き沈降素を生じ其の反應形は抗原濃厚部及び稀薄抗原部に於て反應陰性乃至微弱にして明かに所謂結合帶現象を呈す．4) 微量抗原頻回注射總量家兎體重每 kg 當り 0.00008 cc 前後に於て大體單位量の沈降素を產生するものの如し．

36) 補體結合反應により抗體抗原好適量の證明

○緒方益雄
原穗 (衛生)

各免疫反應或は血淸反應に於て其の免疫價測定に當り免疫血淸の最高稀釋の陽性反應を以て其の免疫價となし或は亦抗原の最高稀釋を以て免疫價を標示せんとし其の際に用ふる他の反應原たる抗原は一定のものを用ひ，亦後者にありては抗血淸の原液或は任意なる稀釋を用ひつつあり．然るに免疫原の結合竝に反應には各抗血淸に抗原の好適量ありて兩者一定比に於て最も强く反應を起すことは旣に沈降反應，凝集反應，亦補體結合反應，過敏症の生體實驗に證明せし所なるが沈降反應に於てこの量的關係を求むることは先づ最高稀釋血淸に於て反應する抗原の好適量を求め，之を結合帶と稱し之より抗體の增强するときは抗原も亦增加せる點に反應速に强く起ること廣田，大川の實證せる所にして之を 1 E.H. の抗體と 1 E.H. の抗原とすれば 2 E.H.—2 E.H. となること時間的に證明し反應帶となる．補體結合反應に於てこの反應帶を求むることは最高稀釋の抗血淸に於て求むるより其の反應樣式が旣に終りたるものを溶血反應にて求むる爲，證明困難なりしが此處に補體結合反應に於ける補體の增減に着目しこの反應帶の移動を求めんとせり．抑も補體結合反應に於て用ふる補體價は 2 單位を以て行ふを常法とせるが之を 1 單位，1 單位半と減少し 2 單位より 3 單位，4 單位と順次增强し行く時に果して補體結合は如何なる樣式を示すかを見るに補體の減少と共に反應は陽性度强く現れ亦增强と共に補體結合反應は陽性度弱くなり，この時に尙ほ殘存せる陽性の部分は結合强き部分と推測せられ其の關係が恰も沈降反應に見る反應帶に相當するものにして遂には補體の過剩にありても，よく 1 箇所の反應を殘すのみとなり更に過剩になる時は全く陰性を示す．このことは蛋白血淸反應に於て余の證明したる所なるが原は之を「リポイド」抗原抗體に實驗し略ぼ所期の目的を達せり．卽ち從來時に反應の孤立陽性部分を手技の缺陷となせしも或は此の如き條件の下に陽性を示すことあり得ることを證明し亦補體結合反應に用ふる補體量は 1.5 單位を以て充分なりと主張するものなり．

37)「ピクリン酸」を投與せる家兎尿中の「ピクリン酸」及び「ピクラミン酸」に就て．附「ピクリン酸」及び「ピクラミン酸」の新定量法

吉田道孝（法醫）

從來尿中に於ける「ピクリン酸」及び「ピクラミン酸」定量の報告甚だ少なかりしは，尿中に於ける夫等兩物質の微量なる爲，適當なる定量法なかりしによるものなり．吉田は「ベンチエドリン」又は「ホスピタン」の「ピクリン酸」に對する呈色反應を應用して「ピクリン酸」を，「ヂアゾ化」し，「βナフトール」を加ふることにより生ずる呈色反應を應用して「ピクラミン酸」を，夫々定量せんとし，「ピクリン酸」を投與せる家兎尿に就き實驗せり．其の結果を報告す．

38)「ピクリン酸」の經口的投與に於ける家兎血液の Glutathion 變化に就て

河野　豐（法醫）

「ピクリン酸」は健康家兎に與へられたる場合尿中に「ピクリン酸」及び其の還元物として排泄せらると云ふ．生體内に於て酸化還元に重大意義を有する「グルタチオン」が「ピクリン酸」投與の際如何に消長するかを還元型，酸化型及び「總グルタチオン」定量によりて窺はんとす．

39) 糖尿患者の血糖及び排出閾値に及ぼす「ビタミン」Cの影響に就て

矢谷道義（稻田內科）

予は20例の糖尿病患者を實驗對稱に選び10例宛2群に分ち，第1群には「ビタミン」C 1日量200 mg を靜脈内に1週間連續注射し，第2群は「ビタミン」C注射を行はずして夫々一定量の葡萄糖を負荷し，2回に亙り其の負荷血糖曲線竝に糖排出閾値を檢せり．「ビタミン」C注射例に於ては對照實驗に比し左の諸點が著明である．即ち 1) 空腹時血糖は症例の 62.5%（20—40 mg %）に於て下降す．2) 糖負荷に依る最高血糖値は「ビタミン」C注射後に於ては症例の 75%（35—70 mg %）に於て低下す．3) 糖尿出現の時期は其の過半數に於て遲延す，之「ビタミン」C に依る低血糖作用と關係あるものと考へらる．4) 糖排出閾値は 131—250 mg % の範圍に存す，併し最も多きは 161—220 mg % のものである．5)「ビタミン」C 注射に依り閾値は症例の 70%（15—55 mg %）に於て下降す．即ち「ビタミン」C は糖尿病患者の糖同化機能を良好ならしむるものと推察せらる．

40) Fuchsin-S に依る肝臟機能檢査法に就て（第1報）

植田安昌（稻田內科）

Borak は Fuchsin-S の尿中排泄試驗は人體に於て肝臟機能檢査法として用ひ得べきことを立證せり．併し同氏は肝臟障碍時に於ける「F-S」排泄障碍に對し何等精細なる根據を與へて居ない．余は家兎を用ひ總輸膽管結紮，四鹽化炭素投與及び網內系閉塞により肝臟機能障得を惹起せしめ其の前後に於ける尿中「F-S」排泄竝に「アドレナリン」過血糖狀態を比較し次の樣になつた．1)「F-S」試驗は四鹽化炭素による肝臟實質細胞變性の場合は勿論尙ほ鬱滯性黃疸の場合に於ても亦用ひられるのみでなく，網內系機能脫落の判定に際しても用ひられることが出來る．2)「F-S」に依る肝臟機能檢査法は其の經口的投與によつてのみ可能であつて皮下注射は推知するに足る所見を與へない．3)「アドレナリン」過血糖は總輸膽管結紮の晚期では勿論早期に於ても亦著變を示す，亦四鹽化炭素中毒に際しての「アドレナリン」過血糖曲線の變化は「F-S」經口投與後に於て認めらるる「F-S」排泄の障碍と略ぼ相一致し網內系閉塞によつては「アドレナリン」過血糖曲線は格別の變化を認めない．

41)「カラ・アザール」の5例に就て

松岡健雄(北山內科)

演者は昨年偶々當地方に於て「カラ・アザール」の5例を經驗し且5例共容易に「ライシュマニア・ドノバニー」の檢出竝に培養に成功したるを以て特に下記の諸點に就き報告せんとす. 1) 5例共當科入院に至るまで種々なる診斷名を附せられしこと. 2) 本症例と流行地との關係. 3) 5例中1例は終始無熱に經過せり. 4) 全例に於て脾腫竝に肝脾を認めたり. 5) L. D. 小體檢出には總て胸骨穿刺を實施せり. 6) 培養基は N.N.N. 及び孟氏培地を使用せり. 7) 治療としては專ら「ネスボサン」を靜脈內注射せり. 8) 患者の腹部寫眞, 骨髓中の L. D. 小體竝に其の培養により發育せる「レプトモナス」型の寫眞を供覽す.

42)「カラ・アザール」7例の觀察

○戶部一郎
植田安昌
三宅俊一郎
(稻田內科)

北支よりの歸還兵たる7名の「カラ・アザール」患者に就き, 其の病歷, 現症, 諸種臨牀檢査成績, 治療及び經過等を總括的に報告す. 詳細は追て雜誌に發表の豫定なり.

41番, 42番に對して追加

村江通之

「カラ・アザール」患者にして脾腫が最後まで殘る場合超短波を適當量照射するとき其の脾腫を消失したることあり.「カラ・アザール」患者にしてワツセルマン反應が陽性に出るものがあるがこの場合長期間にわたり觀察するとワツセルマン反應は其の他の血淸反應より早く消失するが如く見受けたり. 而して其の消失は驅徽療法は別に行はずして見たり.

41番, 42番答辯

松岡健雄(北山內科)

ワツセルマン反應は私の例では5例共陰性であつた. 潛伏期: 渡支直後罹患せるものと假定して1年乃至4年5箇月であつた.

41番, 42へ追加

吉田道孝(法醫)

「カラ・アザール」患者に於てワ氏反應の爲徽毒と一時誤診せられたる例を追加す.

41番, 42番への追加

北山加一郎

肝疾患の時ワ氏反應が徽毒があらはれてくることもあるが又剖檢で肝癌であつても合併して陽性のことあり, かくワ氏反應の陽性の人は多いから偶々或疾患と合併する場合が考へられる. よつて「カラ・アザール」のワ氏反應に就ても餘程愼重に考慮せねばならないと考へる. 本症にかかる前のワ氏陰性で發症と俱に(+)となるとか,「カラ・アザール」の治療により他症狀とともに(−)となつた例が多いと云ふ時に始めて「カラ・アザール」はワ氏反應を陽性となすと言へるのでなからうか. 只今の少數の例では批判することは出來ない.

43) 腎機能檢査特に絲毬體機能檢査に關する實驗的研究

戶部一郎(稻田內科)

腎機能特に絲毬體機能檢査法として「クレアチニン」及び「フエロチアンソーダ」を用ひClearanceを測定せり. 健康家兎, 馬杉腎炎家兎,「カフエイン」注射例,「アドレナリン」注射例に就き行ひたる成績を觀るに腎機能特に其の絲毬體機能を佳く表示し良き檢査法なりと思考せらる. 詳細は追て雜誌に發表の豫定なり.

44)「ヒステリー性」低格人精神發作に就て

佐々木高光(精神科)

未曾有の難局は, 人的物的要素の動員を必要とし, 個人的生活より集團乃至團體生活裡に義務的

乃至强制的仕事に携ることを要求じてゐるが，ここに一課題を提供するは低格人である．低格人に見る種々雜多の精神病狀態は，一過性にして其の後に殘遺を殘さぬことを特徵として，Sioliにより低格人精神發作と命名一括された．最近私達はかかる低格人の「ヒステリー性」精神發作を起せる者を多く見るに至つた爲，其の病像を觀察して，これが極めて些細の誘因によりて惹起され，且呈示する證狀の monosymptomatisch なるを特徵とするを知つた．かかる疾患漸く增加の傾向は，防遏の點よりしても，特に重要な關心事と思ふ．

45) 强迫神經症の1治驗例

三　好　幸　三（精神科）

强迫觀念を主題とする疾患を次の3群に分つ，1) 强迫性格を有する純粹の型で若年に初まり一定した觀念群を持續し森田氏の特殊療法或は精神分析療法以外に殆ど治療法なきもの．2) 一定した性格を有せず比較的成長後に初まり症狀變化し易く必ずしも特殊療法を要せざるもの．3) 他の疾患であり乍ら强迫觀念を主題とするもの．玆に報告するのは第2群に屬するもので32歲の女，1年前に初まり數回强迫觀念の內容が變化し現在は不潔恐怖が主題である．60日の豫定で精神分析の瀉下療法を施行し旁「阿片チンキ」の漸增漸減法を行ひ丁度60日目に全治したものなり．この種の疾患は別に珍らしいものではないが系統的精神療法を必ずしも必要とせず比較的短期間に治癒するもので患者の心理を知悉し精神療法に興味を有する者ならば多少の勞を厭はず臨機應變に處置すれば大いに效果を期待し得るものと思ふ．

46) 岡山醫大看護婦養成所生徒竝に看護婦保健調査成績（第1報）

安　水　仁　司（北山內科）

岡山醫大看護婦養成所生徒180名，看護婦96名岡山縣衛生會看護婦生徒86名，計362名にマントー氏反應を施行し，入所以來の年次別に之が比較を試みるに，マ氏反應陽性者第1年度17.1%，第2年度35.5%，第3年度57.4%，第4年度に至り84.2%の最高を示し，第5年度以降者にては69.2%となり，第2年度より稍々著明なる陽性轉化を示しつつ第4年度に至りて最高となるを知れり．一方昭和14年度入所以來の養成所生徒の病氣缺勤延日數，新患者數，病名別等に就き年次別に調査せるに，第1年度に於ては百人當り平均1日患者數は1.2にして，感冒疾患を主なるものとし，結核性疾患甚だ僅少なるも，第2年度に至るや，結核性疾患の發生著明となり，百人當り平均1日患者數は第2年度5.1，第3年度3.8にして，缺席日數の殆ど總ては結核性疾患にして，他疾患は敢て問題視するに足らざるを知れり．卽ち第2度以降の稍々著明なるマントー氏反應陽性轉化狀況は，結核性疾患發病狀況と相一致せるを認め，結核發病豫防の具體的方策施行に一暗示を得たり．

47) 實驗的糖尿病（ヤング氏犬）に關する研究　第3報　ヤング氏糖尿病犬の甲狀腺組織に就て

野々村太郎（北山內科）

余は旣に第1報に於てヤング氏糖尿病犬の臨狀所見を述べ，又第2報に於てこれの膵臟組織檢査をした．依つて本編に於ては甲狀腺組織に就て述べ，以て人體糖尿病時甲狀腺組織と比較しやうと思ふ．牛腦下垂體前葉「エキス」注射と甲狀腺との關係に就ては夙に Houssay（犬）を始め Loeb, Basset（海猿）及び Jansen, Loeser（幼弱犬及び海猿）等に依り闡明せられたところで，共に甲狀腺肥大，膠樣質の消失及び濾胞上皮の肥大を證明した．本邦に於ては更に詳細なる業績あり，卽ち早津は幼弱雄犬に thyreotropes Hormon を，又竝木は白鼠に前葉製劑 Hypophorin を注射して膠樣質の液化，濾胞上皮細胞の圓錐形化と核の底部移行竝に間質の充血を認め，遂には濾胞狹小と

なり Struma parenchymatosa の像を呈するを認めた．蓋し上述諸實驗の如く單に前葉「エキス」殊に thyreotropes Hormon の甲狀腺組織に及ぼす變化に就ては究明し盡くされた感があるが，余の目的とするところは前葉「エキス」注射による實驗的糖尿病時甲狀腺組織の變化に在る．即ち5例中最も定型的なる持續的過血糖及び糖尿を證明せるB犬に就ては 1) 高度の濾胞變形及び縮小，2) 膠樣質の消失，3) 上皮細胞の圓柱狀化及び 4) 著明なる間質の增殖を認め即ち Struma parenchymatosa の像を呈するも，反之臨牀所見の最も輕度なりしD犬に於ては 1) 濾胞の形狀及び大いさに變化なく，2) 膠質樣の消失輕度にして又 3) 濾胞上皮細胞扁平である．爾餘の3例はこの間に介在し，程度の差こそあれ臨牀所見の程度に比例して上述諸變化を認めたが，注射せる前葉總量及び注射期間の長短には關係がなかつた．只3例に於て膠樣質吸收の過程に在る濾胞内で核は「ヘマトキシリン」に原形質は「エオジン」に濃染せる圓形の細胞を認め，且稀に2核を有する巨態細胞を認めたが，之は夙に Loeb の注目せるところで，膠樣質軟化せる濾胞内に限り認められると述べている．次に人體糖尿病時甲狀腺組織と比較すると長與，李，塚田一和又及び Medwedeff 等寧ろ Struma colloidales の像を呈すとなすに對し，只緒方は著明なる濾胞の大小不同，膠樣質の稀薄化，上皮細胞の骰子形化竝に空泡形成等を述べて稍々余の所見に近似するも概して機能亢進像を認めず，從つて余の所見と背反している．即ち甲狀腺像より見ればヤング氏糖尿病犬は人體糖尿病と一致しない．詳細は原著に讓る．

48) 夫婦間の結核罹患調査

高橋圭爾(北山内科)

夫婦の何れかが開放性結核に罹患した場合，其の家族中最も濃厚なる結核侵襲をうけ，又遺傳因子を異にする其の配偶者に結核が頻發するや否やは外因性重感染の可能性に就て興味ある問題を提供する．本邦諸家の統計は低きは5.9%，高きは60%で未だ一致をみない．依つて余は北山内科入院の開放性肺結核患者52名の配偶者に就て調査した成績を少數例ではあるが玆に報告する．活動性結核は4例にみられ，20歲臺に多く，且何れも結婚後2年以上經過し生活程度下のものに多くみられた．以上より俱患例は(7.69 ± 3.69)%であが，結婚後肋膜炎を經驗した妻の2例を加へれば11.54%となる．活動性結核が20歲臺に多いのは熊谷教授の主張されるが如く本邦には成人初感染が多いとの事實を想起させ，反面生活程度下級のものに多いことは配偶者の結核罹患により逆境に立ち心身過勞のため陳舊病變の再燃を惹起する可能性を示唆し，眞の外因性重感染は有り得るとしても惧るるの要なしと思はれる．

49) 「腸チフス」に合併せる水癌の5例

辻田源伍(北山内科)

「腸チフス」に合併せる水癌5症例を報告すると共に本邦文獻上に蒐集し得たる諸症例を合算統計し種々の事項に關し考按を試みたり．1) 余の5例中の1例は水癌發生後25日間生存し，又左全頰部を侵し，眼窩にまで及べる稀有なる例なり．2) 余の5例は戰時下の生活上の種々なる惡條件が何等かの關係を有するものの如し．3) 水癌は「腸チフス」に合併する場合には其の他の場合と異なり，12歲以下の小兒よりも，寧ろ夫れ以上の者に多しとさるるも，必ずしも特異ならず．4) 水癌は「腸チフス」に合併する場合，男性よりも女性に多きが如し．5) 發生部位は口腔を以て最も多しとさるるが其の左右側には差なし．6) 水癌發生と齒牙とには何等かの關聯あるものの如し．7) 水癌は「腸チフス」の病期の何れに於て好發するや定め難く，個體の消耗甚しき時，或は其の恢復の遲延せる際に發生するものなり．8) 少くとも「腸チフス」に合併せる水癌に於ては白血球增多

症を見，且中性嗜好細胞增多症を伴ひ，又「エオジン嗜好」細胞の存在を認む．9）赤血球沈降速度は全經過を通じ促進せるものの如し，10）豫後は「腸チフス」に合併せる水痘も他の場合に比し殆ど異なる所なく，發生より死に至る日數も亦同樣なり．11）予の5例の死因は總べて心臟衰弱なり．

50）最近17箇年間當科入院肺壞疽患者86名の治療法に對する統計的觀察

姬井　淳(北山內科)

我內科敎室に於ける滿17箇年間の入院患者中本症例86名に就き治療的效果方面を主眼として統計的觀察を試みました．就中著效を奏したと思はれる「リプヨドール」氣管枝內注入に就き稍々詳細に調査せる故ここに發表す．昭和5年以降本症入院患者71例中41例に施行せり．使用例と非使用例の豫後は前者遙に良好である．年齡と豫後との關係には一定の關係なく，病竈部位は左右共に下葉が豫後が良好である．レ寫眞に依る病竈の大さ及び病竈型と「リ」療法の豫後を見るに，治癒率には大差なし，注入回數と豫後との關係を見るに第1回，第2回注入例が非常によく，3回以上になると少し豫後が惡い．このことは本症の主要症狀たる體溫及び喀痰量の2者を目標とし各回注入後に於ける影響を見ますに，體溫は第1回，第2回注入後下降せる者が殆どあります．又喀痰量の變化を見ますに減少せる者は既に第1，第2回で減少してゐるのが殆どあります．以上の事實に依り奏效を來す者ならば第1回，第2回注入で既に效果を顯はす者で，少なくとも3回以上も行ふて效果なきときは，他の療法に移るべきで，頻回の「リ」注入には餘り效果を期待し得ない．發病より「リ」注入開始迄の日數と豫後との關係を見るに本療法は比較的陳舊の者にも奏效する．其の他一過性反應として2—3日發熱を來した者9例，一時的喀痰量增加を認めし者少數あり，又注入後喀血を來せる者3例あるも，之等は既に喀血の傾向を有して居た者で，併發症は餘り考慮するに足らぬ．

51）貧血を主訴とする2血液疾患の症例報告

榎本正治(北山內科)

余は原因不明の貧血性疾患として內科に紹介せらるる患者中近時本態性色素係數下降性貧血竝に再生不良性貧血の尠からざるを强調し，最近14箇年の血液疾患130例を蒐集し，其の中より前者23例，後者28例を見出し簡單ながら臨牀的所見の概要及び療法の一端を述べ殊に本態性色素係數下降性貧血に於ては其の所見は以下述べる如く從來の知見と其の大要に於て差なきも本症には鐵劑が特に突擊療法にて與へらるる時著效を示し患者の主訴も短日時に解消するを以て實地醫家の參考に供せんとす．其の所見の概要は前者に於ては女子に多く且年齡的關係は初潮前後より更年期の間に多く，他に貧血を起す原因全くなく，榮養は一般に良好なるもの多し．主訴は他種貧血と同樣にして主要症狀は色素係數1.0より著明に小卽ち色素係數低下性貧血にして病的細胞を流血中に見ず．小赤血球性大小不同症を呈し，白血球數及び血小板には著明の變化なし．爪甲は屢々貝殼狀を呈し，胃液は多く低酸を呈す．其の他輕微なる體溫の上昇（13例中5例）乃至出血性素因（13例中2例）竝に輕度の肝及び脾臟の腫大を見ることあり（13例中5例）又女子にありては一般に月經障碍を訴ふるもの多く，療法に於て鐵劑が特に突擊療法が著效を奏するものなり．次に後者卽ち再生不良性貧血に於ては　1）年齡及び性別は男16—55歲9例，女16—66歲9例にして略ぼ男女同數なり．2）原因全く不明，豫後不良18例中13例，輕快せるもの5例あり．3）主訴は他種貧血と同樣なり．4）出血性素因は18例中9例認めたり．5）潰瘍性「アンギーナ」を呈せるもの1例に過ぎず．6）體溫上昇15例にして38度內外の發熱を見た

るもの10例あり．7）肝臟肥大11例，脾腫4例，肝脾共に肥大4例なり．8）榮養は不良2例，中等度5例，他の11例は良好なり．9）色素係數1.0内外にして白血球數の減少，淋巴細胞の比率の增加，血小板の著明な減少及び有核赤血球を流血中に見ず．網狀赤血球の減少は10例にして，他の8例は未だ減少せず．10）療法としては反覆輸血及び砒素の併用を早期に行ふ程效果的なり．以上兩者とも敢へて珍稀なものに非らざるも既往に於て十二指腸蟲病として加療されしもの多く，未だ之等の疾患に對する認識の充分ならざるの嫌あるを以て玆に一括し報告せしなり．

52）砒化水素中毒症の追加2例及び剖檢所見

○木下博史（北山內科）
玉川忠太（病　理）

余は既に岡山醫學會第427回通常會に於て「急性砒化水素中毒症2例に就て」の題名のもとに發表したり．其の後又同工場より2週間後2名の同中毒患者を發生し，同日入院せり．仍て玆に追加せんとす．該患者も亦入院時既に著明なる暗赤褐色（日燒け色）を呈し，全身倦怠，發熱，胸內苦悶，嘔吐及び腹痛を訴ふ，同夜血色素尿を見，翌日黃疸を來す．血液及び尿檢査等は前例のものと殆ど同樣にして，前回行はざりし胃液檢査に於て酸度の著しく減少したるを發見せり．2名中1名は第2病日より無尿を來し，第10病日遂に死亡し，他の1名は利尿を得第45病日退院せり．前報告例の剖檢所見は腎臟に最も大なる變化を見，殊に細尿管中には赤血球被壞物質及び圓瘤にて充滿さるるを見たり．

53）微量腦炎病毒證明實驗に際し檢索せる濱崎氏核包含體の出現狀態に就て

平木　潔（北山內科）

腦炎病毒の經膚感染により起れる家兎の微量病毒血症を，所謂累代接種法により證明せんとするに際し，使用「マウス」に就き臨牀學的竝に組織學的所見に注意すると共に濱崎氏核包含體の出現狀態をも同時に檢索し，種々の方面から微量病毒證明に關し後者の有する意義を窺知せんと試みた．

54）淋巴肉腫の1例

土井正一（三宅外科）

淋巴肉腫として稀なる發生部位を卽ち後頭部皮下に發生せる1例につき報告す．

55）總腸間膜症の1例

永井　駿（三宅外科）

患者　關野某，男性，23歲，製材業．主訴．廻盲部疼痛．既往症．家族歷．特記すべきことなし．現病歷．昭和17年8月5日 誘因なくして全身倦怠感，頭痛，食思不振あり．當時體溫37度3分．地方醫を訪れ廻盲部に壓痛あり蟲垂炎ならんと云はれ，以來該部に不快感及び輕度の疼痛あり．現症．全身所見特記すべき事なし，廻盲部に壓痛及び筋緊張あり．術前診斷．假面性蟲垂炎．手術所見．交醋切開を以て入るに蟲垂なし，更に切開を伸したるに膿嚢は之を認むるも右側腹腔內には大腸なく小腸のみなり，卽ち總腸間膜症の想定のもとに左側腹腔をさぐるに普通S字狀結腸の存する部位に蟲垂を發見す．之はSanderaの所謂第2期廻轉の障碍により生ぜる定型的の總腸間膜症にして彼の第1群(b)に屬し Ekehorn の第2群に屬す．蟲垂切除をなし夫れ以上の侵襲を加へず，12日目全治退院す．

55番に對し追加

北山加一郎

總本症の診斷は小腸のレントゲン像をとることで開腹前を俟たずに診斷しえて教室では何等主訴のない看護婦で1例みた（詳細は大田原氏論文に預る）依つて術前の小腸檢査が參考となる．

答

本邦に於て術前レ線寫眞によつて本症を證明し

たもの1例報告された様でございます.

55番に對し追加

某　氏

切除した蟲垂の所見如何.

答

白血球の輕度の浸潤あり. Appendizitis catarrahlis simplex と申すべき所見でありました.

56) Calvè氏扁平椎體症の1例

馬島永太郎(三宅外科)

症例　6歳の女兒. 初診 昭和17年5月23日. 主訴　時々出現する右下腹痛を約20日前より訴へ起立時, 力仕事時, 增强するも間もなく消退するを常とす. 病歷　腸疾患, 「カリエス」等と診斷されたる後來院す. 第1腰椎附近の硬直, 該部脊柱の壓痛及び自發痛あり, 腹部は著變なきも時折, 左前下腹痛あり, 咳嗽時背部に放散する事あり, レ線はI腰椎の不整, 陰影濃化. 9月29日, 椎體上緣はレ線上再生を思はしむ. 昭和18年1月23日. 該皮面に膨瘤を認む大さ耳殼大, 橢圓形, 壓痛, 扛打痛なし. レ線I腰椎の左半部は不整更に增加す. 側面像に於て定型的扁平化を認む. 要之椎體の扁平化, 濃影化, 椎間間隔の縮少しがたき事. 年齡14—4歳の間, 胸腰椎界附近にて多くは1椎體をおかす. 「カリエス」に似て然らざる點等より本症を診斷しえたり.

56番へ追加　上村良一

演者の述べる患者の血液は中等價 6.5 で, マントウ氏反應2回共に陰性なりき. 13歳の中學生の胸椎第6に發生せる1例を追加す. 椎體の扁平化と椎間腔の正常なること竝に椎體腹側の膨隆は本症のレ線檢査に於て重要なる所見なり.

57) 前頭腦切除患者7例の術後經過觀察

甲斐太郎(三宅外科)

余は昭和16年恩師石山敎授により施行されたる前頭腦切除患者7例に就きて術後2箇年現在に於ける經過を觀察し, 次の結論を得たり. 眞性癲癇に對する前頭腦切除術は余等の經驗に於ては其の術後經過良好ならず, 從ひて發作頻發する一部の症例を除き, 其の適應認め難し. 然れども一部の精神病に對する Moniz 氏手術, 或は其の變法としての前頭腦切除術に關しては今後尙ほ研究の餘地存す可し.

58) 腰痛の1考察

上村良一(三宅外科)

演者は三宅外科敎室1年間の腰痛患者を統計的に觀察し, 脊椎結核によるものと同等に或は夫れ以上に所謂「ロイマチス性」疾患によるものあることを指摘せり. 之等兩者は何れも慢性なる經過をとり, 容易に死亡すること少く, 之が養生看護には國家竝に個人の經濟的負擔も極めて甚大にして且又現今の如き戰時下に於ては之等による勞働力制限は重大問題なれば之が診療の進步發達を希ひたり.

59) 潰瘍穿孔胃の組織像

三宅博

胃及び十二指腸潰瘍成因に關して今日未解決の點は多々あるも就中潰瘍の慢性化と胃液消化作用の確證の有無が最も主要な點であると思ふ. 演者は新鮮なる穿孔胃潰瘍切除例2例に於ける組織學的研究により, 結締組織激化竈を穿孔部に認め, この現象は「フイブリノイデ變性」に非ず又炎衝にあらず. 胃液侵銅作用の特徵なる事を述べ, 併せて人潰瘍胃の組織所見とを比較した. 卽ち人潰瘍胃に於ては「エロヂオン」胃炎, 潰瘍等の所見以外に毫も胃液作用の像なし. 穿孔時の潰瘍胃は專ら潰瘍が現在進行せる狀態の變化を呈するもので, 普通外科的療法に於て切除されたる胃に於ては其の成因を論ずるには餘りに陳久に過ぐ. この意味に於て潰瘍成生に對する胃液の作用は根本的のも

のにして恐らく其の分泌異常が主役劇を演ずるものである．斯る穿孔胃の穿孔部位に於ける激化鹽は初めてプール教授により發見されたもので，胃潰瘍成生を論ずるに方り最も必要な所見であると考へる．

60) 外傷性水晶體脫臼の1稀例に就て

藤原壽子（眼科）

打撲墜落等による水晶體脫臼は其の外力の種類竝に程度により偏位の狀況も種々あり不全脫臼，完全脫臼あり，脫臼場所も硝子體內，前房內或は結膜下脫臼等あり．外傷性水晶體脫臼の內之が結膜下に脫臼せる報告は本邦にては僅に10數例に過ぎず．私は玆に種々なる合併症を有する水晶體結膜下脫臼の1例を經驗したるを以て報告す．患者は53歲男子にして突然手拳にて左眼を擲られ，翌日より視力障碍を來し6日目に當外來を訪れたる者にて初診時角膜直上方に帶黃色を呈する直徑1cmの球狀の隆起を認め，虹彩上部は缺損し，離斷されし虹彩の一部は暗紫色に球結膜下に透見し得，視力は僅に手動を辨じ，硝子體出血の爲眼底は窺ひ得ず．水晶體結膜下脫臼ならんとの診斷の許に手術を施行したるに果して球結膜膨隆部より稍々軟化せる水晶體出で，角膜緣を去る約2mm上方にて鞏膜穿孔部位を認めたり．卽ち本例は手拳にて打撲を受け，上方に鞏膜破裂を來し其處より水晶體の結膜下に脫臼せし症例にして術後1週間にして治癒退院せるものなり．

61) 淋巴性白血病の眼症狀に就て

安藤正睦（眼科）

Liebreichが1861年白血病患者の眼底が橙黃色を帶べる事に注目して以來，白血病性網膜炎其の他の眼症狀の合併すること漸次闡明せられ，我國にても20數例の報告あり，內10餘例にては組織的檢索行はれ，本症の本態も明かにされて來た．私は42歲の男子にて，約半年前より腋窩，側頸部の淋巴腺腫脹と約1箇月前より胸部背部の皮膚に多發性に赤色の出血性發疹を主訴として三宅外科に入院せる小淋巴性白血病患者を觀察せるを以て其の眼症狀につき述べん．初診は昨年12月19日で，約半月來輕度の霧視と流涙あり．視力は兩眼共に1.2，眼瞼は輕度に浮腫あり，皮膚は暗赤色に染まり，瞼結膜及び球結膜(外側部)下に鮮紅色の出血をみる．瞼結膜出血は20日前より，球結膜下出血は數日前よりみたりと．網膜の色は少しく濁濁し，乳頭の上下方に2—3箇の小出血斑を見るのみ．其の他には變化なし．然るに本年に入り，球結膜下出血は內側にも擴り，眼底にて，靜脈は怒張し，一部分迂曲し，靜脈に沿ひ小出血をみる．之が2月に入り益々著明となり，各血管に沿ひ粟粒大の多數の出血斑現れ，中に出血による赤き暈輪に圍まれたる白黃色斑を認め，定型的の白血病性網膜炎を呈し來たれるものなり．白血病にて普通見られる眼症狀は先づ網膜炎が多く，本症例の如く，外眼部に見られることは少く，結膜出血，眼瞼出血の報告は我國には1,2あるのみ．稀には前房出血，硝子體出血あり．眼瞼，結膜下，眼窩の淋巴腫，ために眼球突出を起すことあり，又急性球後視神經炎，鬱血乳頭視神經萎縮，瞳孔の散大，縮小，稀有なるが虹彩毛樣體炎，綠內障等を併發することあり．

62) 進行性黃斑部變性症に就て

黃乾泰（眼科）

演者は1909年Stargardtが始めて詳細に觀察した所謂Stargardt型黃斑部變性症の2例を治驗したので追加報告したい．第1例 志々田某，27歲の男子，眼症狀は12歲頃より兩眼視力障碍があり，學習に大なる障碍がなかつたので其のまま放置した．當時の視力は兩眼共に0.6．視力障碍は徐々に進行し中學4年頃では兩眼共に0.2となり，21歲徵兵檢査の時は同樣に0.2であつた．家族歷としては兩親が血族結婚，同胞6人で2番目

の姉が小學時代より視力障碍があるが本症と同一か不明である．眼所見 R.V.＝0.1(gbn) L.V.＝0.1(gbn) 兩眼共に外眼部，中間透明體に變化はないが，黄斑部に約2乳頭大の境界鮮明な横精圓形の汚穢帶黄白色の混濁部を認め，所々暗褐色の色素が密に沈着して居る．乳頭に變化はないが周邊部の網膜血管に沿ひ數多の黄白色の小斑點が散在して居る．尙ほ患者は兩眼共に約4°の比較中心暗點と求心性視野狹窄があり，且赤綠色盲が證明された．暗調應は兩眼共に暗調應初期に於て減弱を示し，15分後は略ぼ健常者の値に接近したが自覺的には夜盲を訴へない．第2例 花岡某，24歲男子．眼症狀 約4年前は視力兩眼共に1.2であつたが夫れより漸次に低下して現在の狀態に至つたといふ．家族歷としては兩親に血族關係はないが母親が患者と同樣に視力障碍がある由．同胞は5人，共に健常．眼所見 R.V.＝4m/Fz(gbn) L.V.＝0.1(gbn) 兩眼共に外眼部，中間透明體に著變なく，眼底に於て黄斑部に右眼では約2乳頭，左眼では約1.5乳頭大の境界明瞭なる，金箔色に輝く細粉の密集した樣な變性部があり，所々に黒褐色の色素の沈着を見るが乳頭竝に網膜周邊部には變化がない．尙ほ右眼では約5°，左眼では約4°の比較中心暗點があり，視野は外界に稍々狹窄のあるのを證明せられ，且後天的全色盲が認められた．暗調應は第1例と同樣に初期に於て減弱を示したが，約30分後には健常者の曲線に大分接近するのを見た．自覺的には夜盲がない．上記2症例は遺傳的關係に就て稍々調査不明なる所があるが，發病の時期，經過，兩眼同時に侵された點及び眼底所見等より考へて家族性進行性黄斑部變性症(Stargardt)と思はれ，又原發性網膜黄斑部變性を一括して遺傳性黄斑部變性症(Heredodegeneration der Macula)と總稱したBehrの分類に從へば同症の若年型に屬するものと考へられる．

63) 小兒横紋筋腫の1症例

○木下 淳
小倉道郎 (小兒科)

滿5箇年の男兒の骨盤底に發生し縱隔竇及び頭蓋内に轉移せる肉腫ならんと推せし腫瘍が剖檢により横紋筋腫なりし1症例を經驗せしを以て之を報告せんとす．．

64) 「ヴイタミンD」劑の所謂突擊療法に就て

小倉道郎 (小兒科)

近時提唱されし所謂「ヴイタミンD」突擊療法に關し乳兒に就て得たる經驗を述べんとす．

65) 若干輕微疾患の乳兒體重への影響に就て

田村 章 (小兒科)

日常往々に起り易き若干輕微疾患が乳兒體重に如何に影響さるやに關する觀察成績を述べんとす．

17時40分閉會．

本日緒方，遠藤，北山，三宅，畑，根岸の各教授，池上，林の各助教授には座長として演說を斡旋せられたり．